

第十回熊本大学附属図書館特殊資料展

細川重賢の文事

出品目録

平成5年11月15日～17日

熊本大学附属図書館

◇永青文庫資料

1. 靈感院様御懷中日記

整理番号 107.37.40

重賢自筆の日記。簡略なメモながら、宝暦11年(1761)から天明5年(1785)までの25年分25冊が残っている。重賢44歳から逝去する68歳迄である。学問、詩、俳諧、仕舞、獺、他出、来客等の記録である。(9×17.2cm～12.8×18.8cm)

2. 重賢公御側日記

整理番号 12.6.15

宝暦12年(1762)、安永2年(1773)、安永7年(1778)の3年分のみ存するが、「1. 靈感院様御懷中日記」よりも記述は詳しい。共に、『重賢公日記』(『出水叢書』9,10,汲古書院)に「靈感院様御懷中日記」の影印、「重賢公御側日記」の翻刻がある。(13.8×20.5cm～2.7×14.6cm)

3. 重賢公御代筆扣

整理番号 8.1.12

大本2冊。重賢が諸公に出した書簡の控えを後で写してまとめたもの。上冊は、宝暦8年(1758)11月28日付け木下大和守宛のものから始まり、明和8年(1771)堀大和守宛のものまで。下冊は、安永元年(1772)9月25日付け松平図書頭宛のものから、天明3年間正月十一日付け酒井修理大夫宛のものまで。日付の順が前後入れ違っている箇所もあるが、基本的には年月日順に配列してある。宛て先の下方に「佐十郎」「吟十郎」「文次」等と記してあるのは右筆の名であろう。上冊巻頭に書簡の言葉遣いに関する重賢の指示・教示をまとめてある。近縁の諸公や仲の良い大名へあてた挨拶状が殆んどで、「華裡雨」名の手紙もあり、大名重賢公の私的な交遊の一面が良くわかる記録である。(27.0×19.5cm)

公開講演会

講師	熊本大学教養部教授	西田耕三氏
演題	細川重賢の文事について	
日時	平成5年11月16日(火)	13:30～15:00
場所	附属図書館会議室	

4. 銀台遺事

整理番号 4.2.20.2

『銀台遺事』4冊。『附録』1冊。細川重賢の事蹟を高本紫冥が撰述したもの。ところどころ時の藩主斉茲による削除の指示がある。『肥後文献叢書』第1巻所収本の底本。(25.8×19.3cm)

5. 綿考輯録

整理番号 106.7.5

『重賢君綿考輯録』3冊。3冊目『重賢君附録』に文事関係の記事がみえる。宝暦5年(1755)の歳旦句「春立て鯉のうろこやのほり龍」をはじめとする発句、および和歌。寛延2年(1749)妙解寺参詣時の詩作をはじめとする漢詩、江戸での詩会の記事等が抜き書きされている。(27.5×20.0cm)

6. 御家譜続編 附録(霊雲公・隆徳公・靈感公)

整理番号 7.3.3

5と重なる記事も多い。泰勝院(細川幽斎)追善の御会「寄月懷旧和歌」には、大川義俊、細川興文(宇土城主)、宮之(松井式部)、玄路(竹原勘十郎)、秋山玉山、片岡維良、昌素(池永一平)らの名がみえ、また女性も多い。末尾に重賢から家臣へ下賜された発句、連句をこの年譜作成のために差し出させた記録がある。寛延4年(1751)10月14日表海楼での俳諧には、「蘭舟君(御前様)」と出ている。重賢の奥方のことであろう。(25.4×18.9cm)

7. 諸先生詩集

整理番号 神45番23印又2番

卷子本。30名、48首の詩を収む。細川重賢に寄せられた詩、および重賢主催の詩会での詩をつなぎ合わせたもの。主な人物は、服部南郭、高野蘭亭、林榴岡、林鳳谷、林龍譚、源伊信(郡山侯、柳沢信鴻、俳号米翁)、豊俊泰(日出侯)、源頼順(水戸藩公子)、藩内の堀勝名、秋山玉山、片岡維良、小堀常春、大谷三益、丁玄寿、等。印のあるものが多く、それぞれ本人の自筆と思われる。成立年次のわかるものは、寛延元年(隆美)、宝暦6年(泰厳、禅寺梅岑)、宝暦7年(林榴岡)。(28.7×25.4cm)

8. 詩集

整理番号 105.3

延享3年6月、7月頃の詩稿。重賢のものと推定する。推敲した跡が見える。詩題等から、竹山老人、沢藤茂次、小堀東溪、大谷参益、桜里、文里、太華、大川上人等との交流がわかる。(27.5×19.6cm)

9. 重賢公御詩稿

整理番号 106.10.17

大本5冊。細川重賢の漢詩集。春夏秋冬雑に分ち、それぞれ174首、55首、114首、84首、17首を収む。ただし『楽洋集』所収の重賢の詩18首はこの中には1首もない。形式としては七言絶句が圧倒的に多い。(26.3×18.5cm)

10. 重賢公并諸子御詩稿

整理番号 108.6.60-1

「九日新晴表海楼参集」「九日表海楼宴集」「少林精舍避暑」などの詩会で、韻字を分かって作った詩。源重賢はじめ、豊俊泰、源忠躬、源興文(宇土侯)、宣雄(服部仲英)、秋儀(秋山玉山)、丁玄寿、埜真清(上野霞山)、大川義俊などの名がみえる。「少林精舍」は義俊がいた江戸東海寺の一塔頭少林院。また、越文学(名越南溪-水戸藩儒)宛重賢の書簡も記録されている。越文学が常陸へ帰ろうとしてあいさつに寄った時、重賢は臥せていたので、詩を附してあいさつに代えるという内容で、「12. 詩稿」によって宝暦6年(1756)のことであることがわかる。(29.2×14.8cm~29.1×54.8.3cm)

11. 重賢公御詩稿

整理番号 108.6.60-7

2枚。1枚めは、「江上琴興」「江上送人」「暮春寄懷大川上人」など7首、2枚めは「送越子聰帰常陽」2首。「大川上人」は義俊、「越子聰」は名越南溪の事。(39.7×53.1cm, 43.4×81.7cm)

12. 詩 稿

整理番号 105.4.2

半紙本1冊。茶色表紙。表紙右肩に赤地に白ヌキで「鸞囀閣」と刷った紙を貼付。柱に「陽春閣藏」と刻した半葉10行の罫紙を使用している。宝暦5年から天明4年までの年次別の重賢詩稿（ただし記録のない年もある）。中に、木下侯（日出侯）、楽山公子（水戸の徳川頼順）、大川上人、高子式（高野蘭亭）、服部仲英等への手紙、泰勝院没後150年にあたる時の「寄月懷旧」と題する和歌「曇なき影にむかしのおもわれて袖は涙の秋の夜の月」（宝暦9年8月20日）等も記録されている。（19.0×13.8cm）

13. 詩 草 集

整理番号 105.4.4

中本1冊。写本。「詩草集（延享二丑早秋）」と「詩艸（延享三年丙寅六月）」の二冊を合綴。延享2年の53首、3年の54首の詩を収む。「詩草集」の表紙に「擇安外」「利渉」の印あり。重賢が藩主以前、利渉君と言われていた時代のもの。（20.2×13.4cm）

14. 重賢公御物御詩作

整理番号 106.11神黒番外1.9

「晩秋少林精舎来集得支韻」と題した詩会での詩。源重賢、豊俊泰、橘元助、望三英、呂実夫、僧麟、秋儀、丁玄寿、維良、田直元、埜直清、堀春純、釈義浚、釈義帆が出席。服部南郭と服部仲英は待てど来なかったらしい。（25.4×172cm）

15. 狂歌俳諧

整理番号 108.4.2

表紙右肩に12と同じ「鸞囀閣」の貼紙。「十六夜少林院席上にて 十七夜よいからくりの鶏も武田が芸にまけぬ 立待」をはじめとする狂歌31首。重賢の作を中心に諸公の俳諧の書き留めもあって、天明5年の「時雨るゝや明り障子に音はかり」の重賢句で閉じられている。（20.8×13.7cm）

16. 服子遷贈熊本侯序

整理番号 108.4.2

付箋に「南郭真蹟」とある。表紙左肩桃色雲形題箋に「服子遷贈序」、内題は「贈熊本侯序」。重賢が南郭に経世上の意見を求めたのに対し、自分はその任ではないということの理由を述べたもの。『南郭先生文集』4編巻5にも収められている。（28.2×17.9cm）

17. 贈熊本侯序

整理番号 108.4.2

大本1冊。写本。上記16に訓点を付したもの。宝暦6年春の成立。表海楼の罫紙を使用。柱記に「丈夫擁書万卷 何假南面百城」とある。玉山あたりの訓点か。『南郭先生文集』と訓点は少し異なる。（26.8×19.0cm）

18. 詩 集

整理番号 108.4.2

大本1冊。写本。南郭・義浚・退斎・竹山・竹溪・徂徠・堀頭承・太華・熊谷竹堂・玉山・小笠原長義・蘭亭・仲和・釈恵俊・大谷参益・釣玄庵・曇海（深川靈巖寺17世）・竹山人釣竿の詩を収める。詩題中、「利渉君」、「戸部公」と藩主前の重賢の呼び名がみえ、「延享2年11月2日」日付の詩、白銀邸焼出（延享2年2月12日）にかかる移居の詩もあることから、重賢の部屋住み時代のものと考えられる。（28.3×19.0cm）

19. 可 勢 無

整理番号 105.3

大本1冊。安永8年（1779）正月10日・安永7年12月25日の歌仙の記録と「六月十日表海楼小集」「六月十二日表海楼様席上」の詩会の記録。詩会の時期は不明だが、出席者からみて宝暦期であろう。（28.0×20.9cm）

20. 重賢公御発句

整理番号 108.6.60-75

短冊8葉。包紙には、「十葉」とあり、「十」の右に「九」、「内蘭舟様一葉」と墨書。「曙の明けを奪ふや萩の花」

の裏に「安永二年癸巳八月」,「秋風に渡り瀬のつく一夜哉」の裏に「七月四日」と記してある。(36.2×6.1cm)

21. 百 韻

整理番号 2.10.20-1

大本1冊。俳諧記録。表紙に俳諧形式、点者名、興行年月日、興行場所を記す。内容は句と作者名で成り、行間に点者による評点を記してある。作者の右肩の数字はその巻でその作者の何句目かということを示したもの。また、巻尾には点者による高得点者名が記されること(時には、点数まで)が多い。重賢関係俳諧資料は永青文庫に種々の形態で残るが、点取帳とともにこの形態が多い。本冊は、癸卯年(天明3年,1783)百韻5巻分、戌年(安永7年,1778)百韻4巻分の合綴。(27.3×20.0cm)

22. 百 韻

整理番号 2.10.19-2

大本1冊。21と同じ形態のもの。乙未(安永4年,1775)百韻4巻分。子年(安永9年,1780)の百韻1巻分の合綴。(27.7×20.4cm)

23. 二十三評百韻

整理番号 2.10.18

特大本1冊。渭北、花裡雨等45名による百韻に存義等23名の点者が評点を付したもの。後に点者別に高点者3名を掲げた高点表を付す。高点表末に「宝暦二壬申年正月」と記す。(32.1×23.6cm)

24. 二百韻二十評

整理番号 2.6.13

特大本1冊。芭蕉の「鶏頭や雁の来り時尚赤し」を発句とする祇丞、花裡雨等の二百韻に鶏口、万立等20名の点者による評点を付したもの。(32.1×23.2cm)

25. 安永8年己亥年籠元旦披

整理番号 2.6.17

大本1冊。抜句集だが、重賢俳諧の興行記録ともなっている。安永8年正月より同9年8月迄、および天明3年4月より同5年6月迄の間に、鸞嘯閣、雲和閣、表海楼、扇間、熱海一碧楼で行われた俳諧の高点句を集めたもの。(27.1×18.1cm)

26. 歌 仙

整理番号 2.6.1

点取帖。半紙本。列帖装。種々の模様を彩色した表紙に、間に合い紙の料紙から出来ている点取帖で、同種のものが80冊以上永青文庫に残る。他の文庫等にも数冊ずつ残っているのを見かける事があるから、おそらくこのような形の冊子そのものは市中で制作されていたものと思われる。引墨、点印を施し、巻尾に点者の署名、印、高点句の書き抜きがあるのが通常である。(22.0×16.8cm)

27. 御俳諧之摺物類

整理番号 2.8.13

(1) 春 興 帖

半紙本1冊。歳旦刷り物。表紙中央左寄りに楕円形石摺りで「春興一巡 八十一歳親和書」と刷り、右に「安永九年庚子鸞嘯閣」の文字と暦を朱で刷り出す。華裡雨の「梅咲て硯の海もぬるみけり」を発句とする楼川、存義他の四十六韻。配り物であろうが、珍しい。(21.7×14.5cm)

(2) 歌 仙

1枚。歳旦の懷紙刷り物。端作りに「安永十年辛丑」の文字と暦を朱で刷り、その下方に黒で臥牛図を配す。花裡雨の「ゆる／＼と春は来にけり丑の年」を発句とする好山、鶏口他の歌仙。これも配り物であろう。(35.4×55.0cm)

28. 靈感院様御筆御聞書之御本「聞書 全」

整理番号 108.6.60-22

大本1冊。千利休が天正9年(1581)に書いた茶道論を写したものに朱で書き入れをしたもの。包紙に「重賢公／夫茶の道ハ和漢とも 一冊」、中の包紙に「靈感院様御筆／御聞書之御本」とある。「夫茶の道ハ和漢とも」は千利休の茶道論の書き出し。朱の書き入れが重賢の筆なのであろう。(27.6×18.1cm)

29. 国語鈔

整理番号 107.37.39

大本1冊。『国語』からの抜き書き。包紙に「重賢公御筆」とある。また薄茶色の袋があり、その中央に「国語鈔 韋昭注十冊」という題箋が貼付され、右側に「安永四年乙未三月十七日行舟中造」と墨書がある。この墨書と同筆で、本文末に「安永四年乙未三月于西海舟中」とある。安永四年は重賢55歳である。本文は、朱で作った罫紙(半葉10行)に書かれ、上部に「韋昭注」の巻冊を示すと思われる数字が記されている。(24.2×17.6cm)

30. 雑記帳

整理番号 105.3

大本1冊。題箋は「雑」しか読めない。仮に「雑記帳」とする。藩主になる前の重賢が様々な事柄に関して記録したものが残ったものと思われる。内容は、漢籍からの抜き書きが多いが、俳諧や漢詩の書き抜き、肥菓の作り方2種類、阿仙菓の調合の仕方、浅草観音堂の聯額の写し、中将姫の歌、鍋島侯の虎皮の鼓の由来等、多岐にわたる。後年、『雑事粉冗解』を生み出す土壌を感じさせる。(27.2×18.6cm)

31. 雑事紛冗解

整理番号 4.1.58-2

紛らわしい事柄の解明をめざしたもので、項目はいろは順になっている。重賢が家臣達に命じて積極的に行った調査で、宝暦5年(1755)から天明5年(1785)までの項目を含む。考証を中心とした近世の随筆の一つだと考えられるが、近世随筆の中では特異なものである。たとえば、「ク」の項目は、「釘之寸」「黒部板」「下リムネ」「熊本二而、七種を扣キ候事」「御蔵米之御双場御張紙出候所々左之通」「油直段之事」「蔵」「土蔵」「塗垂」「国群ト定ノ事」「クラカケサ、ゲ」「神代川」「久万引之事」「釘隠鑲甲之事」「公人朝夕人」「葛掛」である。『出水叢書』11(汲古書院)に影印と翻刻が備わる。(24.7×18.8cm)

32. 重賢公御筆一葉

整理番号 108.6.60-52

重賢の「覚」字の筆跡。「忌中之面々用ニ付而忌ヲ免罷出候儀停止之事」「役断之節留候事」「衣服制度之儀平太左衛門江しらへ申付置候事」について詳しく書いたもの。(16.0×40.0cm)

33. 重賢公御筆 謡本

整理番号 108.6.60-19

大本1冊。謡曲「田村」と「羽衣」の抜粋。以下のような袋書がある。

「有隣院様御若ク被為在候砌御鼓を被遊候節、靈感院様より此御本を被進候由御老女預りにて御筆之様ニも被覚候由、若殿様御譲受之御品と一ツニ仕置候様ニとて被相渡候、福田殿被見候而本文ハ樋口玄可執筆ニ而可有之候、節付ハ靈感院様御筆ニ而可有御座由被申候事、但朱書ハ誰とも難分由。」有隣院は重賢の奥方。(28.0×19.8cm)

34. 袋に入れたる諸印影ならびに重賢筆跡

整理番号 106.10.12

一袋。茶色布地に金で樹木と鳥の組み合わせ模様(裏面は金箔)を描き出した包紙。(23.2×10.2cm)

- (1) 濃茶地に菊花の金箔模様の中袋の中に、印を押した紙片・布片と「春日披雲閣席上贈兩尊者」の七言律詩一首。
- (2) 茶地に鳥と蝶の金箔模様の中袋の中に、印(「山水有清音」「万寿無疆」「龍門」「君聲」他)を押した紙片、「九日表海樓陪宴尤韻」(途中切れ)、「花裡雨」「梅干に成る顔もせぬむめのはな」「屋敷之事 石小田浜之事」等の筆跡を示す紙片がある。

35. 重賢公御筆仏足跡写

整理番号 108.6.60-48

1枚。約110cm×140cmの横長の額に「仏足跡」と右より書き、左側に「銀台書 印 印」とある。斉護公の書き留めには、「靈感院様／御筆之写／仏足跡／右南都七大寺／薬師寺／文政十二年七月四日写」とある。奈良薬師寺の「仏足跡」の扁額を重賢が書き、後に熊本第10代藩主斉護がそれを写させたものらしい。薬師寺に現存するかどうかは未確認。

36. 龍ノ口御絵図

整理番号 106.5

龍口の屋敷は何度も火災に遭っている。この絵図はいつの時期のものか不明。ただし、重賢文事の中心的な場所であった鸞嘯閣、表海楼はじめ、屋敷の一部が立体的に作成されている。(86.3×131.8cm)

37. 龍口御屋敷

整理番号 8.4丙76

龍口御屋敷の鸞嘯閣、表海楼と能舞台、見物所が記載されている。改築のたびに屋敷の配置が少しずつ違っていくことが36との比較でわかる。(99.6×137.6cm)